

# 教室が あなたを 待っている!

～AI時代の先生

萩生田光一（衆議院議員）

佐々木幸寿（東京学芸大学副学長）

堀口悟郎（岡山大学教授）

貝塚茂樹（東京財団政策研究所研究主幹／武蔵野大学教授）

松本美奈（東京財団政策研究所研究主幹）

# 目次

はじめに

A I時代の教室にいる先生は、人間？ロボット？それとも？……………2

第1章

子どもに勇気を与え、その人生をも変える、それが先生だ……………5

元文部科学大臣 萩生田光一 衆議院議員  
聞き手 東京財団政策研究所研究主幹 松本美奈

第2章

私は、野球部の監督になりたくて、教師になった。……………11

東京学芸大学副学長 佐々木幸寿

第3章

A I時代に人間の教師は不要か？……………17

岡山大学教授 堀口悟郎

第4章

A I先生はナンセンス 善悪を主体的に判断できるのは人間だけ……………24

東京財団政策研究所研究主幹／武蔵野大学教授 貝塚茂樹

第5章

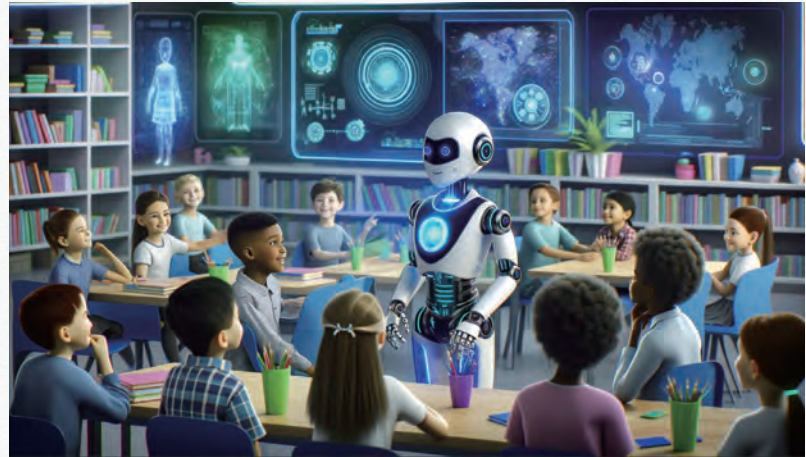
A I時代の先生はどう働いているか？……………29

東京財団政策研究所研究主幹 松本美奈

おわりに

本と鉛筆のある未来の教室に立つのは……………38

# AI時代の教室にいる先生は、人間？ロボット？それとも？



イラスト①



イラスト②

未来の教室をのぞいてみましょう。まずはイラスト①を見てください。

教室の中央には、ロボット先生が立っています。教室の後ろで光を放っているのは、空間に立体的な映像を映し出すホログラムです。

授業には仮想体験も組み込まれています。子どもは教室の外に「飛び出す」こともできるのです。古代エジプトのピラミッド建設現場を訪れたり、惑星間を飛び回りながら天文学を学んだり。ロボット先生はガイド役で、質問にも即答してくれます。さあ、今日はどこに飛ぶのでしょうか。子どもはみんなワクワクしています。

もう少し年上の生徒の教室はどんな様子でしょうか。次はイラスト②を見てください。

ロボット先生は生徒に関する様々なデータを集めて分析し、それぞれにピッタリな教材や学び方を提示します。人間の先生が担当するのは、感情面でのサポートです（イラスト右手奥の白衣姿）。学習状況はクラウド上に保管されており、保護者も子どもの現実を把握できる仕組みです。学校と家庭との間に境目がなくなるため、いつでもどこでも誰とでも学べる環境が整備されているのです。

以上のイラストと説明文は、実は、みなさんもご存じのAI「チャットGPT無料版」の作品です\*。「ロボット先生が子どもとやりとりする未来の教室を描いてください」とパソコンに打ち込んだら、イラスト1枚につき1分弱、合わせて3分もかからずに完成させました。本当は作成された説明文のボリュームはこんなものではありません。字数が多すぎたので、ごく簡潔にまとめました。使い勝手の良さに、さらに「2枚のイラストを1枚にまとめて欲しい」と頼んだら、「有料版にアップグレードを」と勧められました。ビジネスも上手です。チャットGPTなど高度なAIが広がり始めたのは2022年。わずか2年での急速な性能のグレードアップに世界中が着目し、アメリカや中国などの大国が巨額予算を投じて開発を競っています。日本も国産技術の促進に力を入れています。その一つが病院の患者の診察に役立つAIです。患者の問診結果からあぶり出した病名を医師に伝え、医療の質を向上させようという計画です\*。教室への導入も進められています。新型コロナナ

\*チャットGPT無料版を使用。2025年1月12日12時05分。

\*\*「診療支援へ国産AI開発に政府着手、病名候補を提示」読売新聞朝刊 2025年1月11日付

ウイルスで日本中の学校が休校に追い込まれたこともあり、あまり時間をかけずに全国の小中学生の手元にタブレット端末が配布されました。むろん、タブレット端末にはA-1が搭載されていて、それを通して多くの自治体が子どもの情報を集め、「教育の質の向上」に役立てようとしています。

先ほどのチャットGPT無料版は、説明をこう結んでいました。「未来の教室は、ロボット先生と人間の先生の協力により、単なる知識の習得だけでなく、心や社会性の成長をも支える場となります。子どもたちが自ららしく、そして主体的に学び続けられる環境が実現するのです」(原文のまま)

国や自治体が進めている取り組みの先に、こんな実り豊かな教室が待っているとしたら、ロボット先生には大いに期待したくなります。しかも人間と違って、病気にもならず24時間365日働いてくれる存在。現在は「教員不足」が問題になっていますから、なおさらです。でも、本当にそんな未来だけが待っているのでしょうか。ロボット先生から、具体的に子どもは何をどのように学ぶことができるのでしょうか。そこで集められた学びに関するデータはどこにどう蓄積され、子どもの生き方や人生にどう影響するのでしょうか。

私たちはそうした問題を皆さんと一緒に考えたくて、このブックレットをお手元に届けることにしました。トップバッターの衆議院議員、萩生田光一さんは、コロナ禍の下、タブレット端末配布を推進した当時の文部科学大臣です。どんな「A-1時代の先生」を想定してきたのでしょうか。教員を養成する大学の教授、佐々木幸寿さんは、野球部の監督になりたくて高校の先生になったそうです。そのリアルな経験から、これからの学校や先生に求められるのがみえてくるでしょう。堀口悟郎さんは海外のA-1事情に詳しい、法律の専門家です。光が強ければ影もまた濃い。キラキラした未来の教室の「影」を解説します。貝塚茂樹さんは道徳の専門家です。A-1時代の学校で、人間が生きていくうえで欠かせない善悪の判断、倫理観をどう学ぶことになるのでしょうか。最後に、教室の日常紹介を通して人間の先生が今、実際に何をしているのかをお伝えします。

未来の教室は日々の延長にあります。皆さんが未来の教室に関心を持ち、考えを深め、かなうことならその教壇に立つてくれれば、いくらでも未来の姿は変わるでしょう。ともに未来の教室をつくっていきませんか。

## 第1章

# 子どもに勇気を与え、その人生をも変える、それが先生だ

元文部科学大臣 萩生田光一 衆議院議員  
聞き手 東京財団政策研究所研究主幹 松本美奈



### 1 自分の基礎をつくってくれた先生

——チャットGPTが描いた未来の教室、ロボット先生をご覧になった感想をお聞かせください。

萩生田 楽しそうな教室だけれど、やはり教師はロボットが代替できる職業ではないと考えています。A-1は確かに古今東西の知識を網羅しているでしょう。でも、子どもに寄り添えるのは、人としての教師の強みではないでしょうか。

——まず「人」であること、それが教師だということをお考えですね。文部科学大臣を退いてからも、



一貫して教育問題に熱くかかわっています。学校や教師に深い思い入れがおりとか。さぞや優等生だったのでしょうかね。

**萩生田** いや、まったく(笑)。特に高校時代は。退学にならなかっただけでも先生に感謝しています。

——何をしたのですか。

**萩生田** 他校の生徒とけんかしたり、パーティー券を売ってカツアゲ(恐喝)と誤解されたりして停学処分を食らいました。開催日時が記載されたチケットを渡すのに、邪魔が入るかもしれないと考え、お金だけ先にもらって券は当日渡すというシステムにしたのがよくなかった。

それでも先生は面倒を見てくれた。自分が今ある基礎は学校、先生がつくってくれたといっても過言ではありません。だから、中学、高校時代の先生は結婚式にもお招きし、今夜も先生方と飲み会です。

——基盤を築いてくださったのは、どんな先生だったのですか。まずは中学校時代からうかがいましょう。

**萩生田** 当時は高度成長期で、子どもがどんどん増えていた時代でした。公立中学校も新設校が次々に生まれました。驚いたのは、小学校を卒業して入った八王子市立第二中学校の校庭に、新設予定のひよどり中学校の仮校舎が建てられていたことです。そしてさらに驚いたことに、中学校2年生になったら、「ひよどり山中が出来上がったから、3年生からそっちに転校しなさい」と言われたのです。中3から転校？ 冗談じゃない。今なら、学校選択制とか何か選択肢もあるでしょうが、当時は厳格な学区割りができなくて、その境界を越えたら問答無用で転校でしたから。

もともと学区の線引きで同じ小学校から行ったのは男子で自分ともう1人だけという寂しい環境で、しかも自宅から遠いので自転車で通学していました。僕は野球部に所属していて、八王子二中は三多摩ナンバーワンでした。全国大会は目の前。そこから抜けることになるんですよ。できますか。——悔しいですね。おとなしく転校したのですか。

**萩生田** いや、二中の学区内に住む父親の友人宅に僕の住民票だけを移して抵抗しました。そして、ある日、野球部監督をしていた数学の小俣先生に呼び出されて厳しく言われました。

「おまえがそついうことをしたら、転校を悩んでいる他の子がみんな動揺するだろ。ここは運命だと思って新しい中学校に行け」

野球部の仲間も何人かが転校の対象になっていて、確かにみんな不安になっていました。そんな時に最も信頼していた監督が守ってくれない。しかも「運命だと思って行け」だなんて、冷たいなって。もう、しようがない。諦めてしぶしぶ新設校に転校しました。

ところが新しい学校に、なんとその小俣先生が転任していたんです。聞くと、どこの中学校の先生も新設校には行きたがらなかったそうです。「萩生田を説得したのは俺だから、責任をとって来た」と後に話してくれました。すごくうれしかったですね。

——自分の言葉に責任を持つ、カッコいい先生です。続く高校は早稲田実業でしたね。そこでもずきなエピソードがあったのですか。

**萩生田** 一度も担任にはならなかったけれど、思い出の先生といえばまず、社会の小山内高行先生です。僕が政治家になるうえで、すごく影響を受けました。アメリカ力研究の第一人者でジャーナリスト、本も出していました。

授業も面白かった。教科書はあまり使わず、日米安保や核を積んだ米軍艦船が日本に来ることの問題点とかを語っていました。日米同盟って何、みたいな僕らに、「日本はアメリカの傘の下で平和を享受している」といった趣旨の話をされていました。

昭和55年（1980年）夏の甲子園大会では、うちの高校が決勝まで勝ち上がりました。僕は張り切って甲子園の応援スタンドで日の丸の旗を振った。その僕を見た英語の先生が怒って、職員室で問題提起をしたんです。「大阪まで行って、日の丸振ったバカがいる」と。国旗をめぐる大論争が職員室で起こりましたが、一貫して僕を守ってくれたのは小山内先生でした。「仲間にエールを送るのに、何かを振りたいていう気持ちを高校生が持つのは当たり前だ」「日の丸がダメなら、下着でも振りやいいのか」と論陣を張ってくれました。

それだけで小山内先生は収めず、僕らの教室に大きな日の丸の旗を持ち込んで掲げたんです。「たまに振るから問題になるんだ」と言ってます。

僕にとって教師とは、体を張って生徒を守ってくれる人です。

——一方的に怒るのではなく、理解をして寄り添ってくれる人なのですね。

**萩生田** それは子どもにとってすごく勇氣になる。そういうことが積み重なって、今の自分があるのだと思います。

## 2 教師は子どもの人生を変える

——AⅠがどんどん進歩し、AⅠを搭載したIT機器が広がることで、教師の仕事はどう変わるとお考えですか。

**萩生田** 知識の習得や業務の効率化という観点では、AⅠの活用が進んでいくことはいいと思います。そのような技術革新が続く時代だからこそ、教師による対面指導や子どもの学び合いといったリアルな価値がますます高まると思います。

——教師は、人間にしかできない、高度な職業という点には同意します。けれども現実には「学校はブラック職場」などといわれ、全国で教員のなり手不足が問題になっていますね。

**萩生田** 教師の地位向上に向けた国の施策が必要です。学校の先生になるには都道府県の出す教員免許状が必要です。それを取るための教職課程を大学が設ける際には文部科学大臣が認定するなど、国は一定の関与をしています。このたび教師の処遇改善のために法律改正を行いますが、これに加えて将来的には、文部科学大臣が免許状を授与する「国家資格」にしたいと前から考えています。すでに教員採用選考の一次試験の共通化を、国が音頭をとって進めています。教員免許を持たない社会人が先生になるために都道府県が出す「特別免許状」についても、国が責任を持って研修メニュー整備を進めています。

特別免許状を出す対象としては、民間企業で活躍した人や研究者に加えてオリンピックやプロのスポーツ選手などを想定しています。例えば、サッカー選手だからサッカーのことはか知らないかといったらとんでもない。栄養学やトレーニング法など、プロとして闘える体づくりのための知識や方法を学びながら一流選手になる。そうしたプロが引退後に中学校の体育の先生になつてくれたらうれしいですね。

——未来の学校は、そういう多様な先生が増えているのですね。

**萩生田** そうです。先生は子どもや教育を取り巻く環境の変化を受け止め、子どもとともに学び続

けて、能力を高めていくことも求められています。ゴールのない、高度な専門職です。教師はA-に代替されるどころか、重要性がより一層高まってくると考えています。高校生の皆さんが、これからますます社会から必要とされ、無限の可能性を持つ子どもたちの成長に間近でかわることができる教師という職業を選択肢として考えて下さったら、本当にありがたいです。学校の先生は、子どもの人生の価値観をも変えられるぐらい重要な役割です。志の高い先生たちが増えてくれることが、わが国の未来を拓いてくれます。



## 第2章

### 私は、野球部の監督になりたくて、教師になった。

東京学芸大学副学長 佐々木幸寿

#### 1 私は、高校野球の監督になりたくて、教師になった。

私は、64歳の大学教授です。39歳まで、高校の教師をしていました。当時、高校の社会学科（現在は、地歴・公民科）は、競争倍率も高く難関でした。小学校から大学まで野球をしてきて（大学は5年かけて卒業）、どうしても、野球部の監督になりたくて、高校教師の道を目指しました。

なんとか高校教師になれて赴任したのは、新設校でした。校長は毎朝6時には出勤する名物校長で、生徒の学習時間を確保するために、部活動の終了時間を午後6時半と厳しく制限して



いました。当然、練習がそんな時間に終わるはずもなく、学校に内緒で、練習後、保護者に車を出してもらい、県営球場の室内練習場に通って深夜まで練習をしていました。当時、高校野球界では、監督によるかなり強引な指導もまかり通っていました。多分にもれず、私も、そのような指導者の一人でした（今思うと、当時の部員たちに謝罪したい気持ちもあるのですが、今さら、謝られても困るだろうなあと、ため息…）。その後、赴任した高校でも、監督や部長を務めました。毎日、練習に明け暮れ、年中、野球漬けでした。

甲子園などは「夢のまた夢」でしたが、大好きな野球の指導をしながら、給料までもらえるなんて、私にとっては夢のような生活でした。担任クラスの生徒と、夏休みに県営球場を借りきってソフトボール大会をやったり、生徒会執行部の生徒と「100キロ踏破」というイベントを始めたり。寺や公民館に宿泊しながら、夏の炎天下を100キロも歩き切ったことは、忘れられない思い出です。この妙なイベントはその後、学校の伝統行事となって数十年は続いたという、嬉しいおまけもつきました。

その後、私は残念ながら監督として事実上のクビ（？）になり、野球の指導を離れましたが、今振り返っても、受験指導や生徒指導など、充実した教師生活でした。それだけに、今、現職の教師の皆さん方の苦労話を聞いていると、教師はどうしてこんなに面白くない仕事になってしまったのだらうかと残念に思っています。

## 2 教師は、どうして面白くなくなったのか

今「学校はブラック職場だ」と言われています。部活などで長時間労働になっているにもかかわらず、それに見合った給与が支払われていない、というのです。私は、希望して高校教師になったし、好きで部活動顧問（監督）をしていました。給料は安定しているし、不況でもクビになることもないので、「ブラック」と言われてもピンときません。

仕事として教師をしているのだから、楽しいことばかりではありません。部活動指導のために家族には十分な時間をとれなかったり、進学実績があがらず同僚教師から会議の席上、「佐々木さんは指導力不足だ」と厳しく批判されたりしたこともありました。何よりつらかったのは、監督としての指導に対して部員たちに反発された時でした。自分の人格の未熟さや包容力の欠如、指導の稚拙さを思い知らされ、若い教師として本当にいたたまれないものでした。

しかし、勤務時間が長いこと、時折受ける管理職からの叱責なども気になりませんでした。仕事とは元来、厳しいものだし、職業人とは叱られて成長するものだと思っていたので、「苦労」とは感じていませんでした。

もちろん、私の時代と現代では、教師の仕事の多さや複雑さは、比較できないのかもしれませんが、私の体感に過ぎませんが、分権改革、情報公開が本格化した2000年頃から、教師の立場が微妙に変わってきたように思います。学校の「説明責任」が問われるようになり、教師は「組織人」として対応することが求められるようになりました。それに軌を一にして、マスコミや保護者、地域住民からの「圧力」も強くなってきたように感じています。

それでも、私にとっては自分で選んだ世界で、自分が好きで苦労しているのだから、不平など出ようはずもありませんでした。



### 3 部活動を学校から地域へ

「ブラック」を解消するための方策として、国は部活を学校から切り離し、地域に移行する方針を打ち出しました。2025年度までの3年間で、部活動を段階的に地域に移行する計画です。

例えば、神戸市では2026年度中に部活動を終了し、生徒が地域の方々とともに活動する神戸の地域クラブ活動「KOBEDiamondKATSU」（コベカツ）に移行するそうです。平日を含めた部活動の廃止という思い切った方針を打ち出したのは、政令市としては初めてです。「KOBEDiamondKATSU」のコンセプトは、①校区を越えて子ども自身が「やりたいこと」を選んで活動できること②部活動に無かった新種目や気軽に取り組める活動など、ニーズに合った活動の場を提供できること③子どもが活動の主役となり、大人の価値観を押し付けられないこと―をあげています。

こうした説明を読む限り、部活動の地域移行はバラ色ですが、学校から部活がなくなることについて心配する声も聞こえます。いくつかご紹介しましょう。

- 子どもの学習状況や、生徒指導などの教育的な指導がなくなるのではないかな。
  - コミュニティや集団づくりなど、部活動が持っていた機能が失われるのではないかな。
  - 家庭の経済力によって、クラブ活動の機会に格差が生まれるのではないかな。
  - 部活動に積極的にかかわりたいという教師の希望が生かされなくなるのではないかな。
  - 地域によっては、十分な活動の場や指導者が得られないのではないかな。
  - 送迎など、家庭の状況によって、子どもの活動が制約されるのではないかな。
- 少子化の波は拡大し、部活動に参加する生徒の数は減り続けるでしょう。学校ごとの活動も難し

くなりつつあります。何よりも、教師の働き方を見直さなくてはいけない時期にきています。今までの部活動が、教師の「やりがい」「情熱」に依存してきた一面は否定できません。やはりこれを解決しなければなりません。

### 4 教師の自己実現のカギは「主体性」

その一方で、「部活動命!」という教師からは嘆きの声もあがっています。私のような「野球部の監督になりたくて、教師になった人」は、部活動の地域移行が進んだら、どう生きていったらよいのでしょうか。地域クラブの指導者として兼業も可能だと言われますが、教師として指導するとう醍醐味は、もう味わえなくなるのではないかとも思うのです。

昔から「デモシカ先生」（教師にデモなるか、教師にシカなれない先生）はいました。イヤイヤ仕事をして皮肉ばかり言う先生、愚痴ばかりで目が死んでいる先生も少なくなかった。このような先生と一緒に仕事をするのは、たいへん憂鬱でした。自分の選んだ仕事を、「ブラック」などとは表現したくない。

メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手が高校生の時に書いた人生設計シートにこんな一文があるそうです。「59歳でリトルリーグの監督になる」。

大谷選手は、メジャーリーグで頂点を極めました。3度のMVPを受賞し、WBC（ワールドベースポールクラシック）、MLBのワールドシリーズを制しても、彼の夢は終わらないのです。そっだ、部活動が地域移行されたぐらいで、教師としての人生が終わるわけがありません。

教師としての生きがい、自己実現にとってのカギは「主体性」だと考えています。そもそも教師

は自由度の高い職業です。仕事の中心である授業をどのようにデザインするのか、どのような指導方法を採用するのか、どのような活動を取り入れるか、すべて教師に任されています。今、国は教育現場に「主体的で協働的で、深い学び」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的展開」「カリキュラムデザイン」を根づかせようと、さまざまな手立てを重ねています。つまり、教師にますますの主体性と主導性を期待しているように感じます。教師にとつてますますやりがい、生きがいの感じられる時代がすぐそこまで来ているのではないのでしょうか。



### 第3章

## AI時代に人間の教師は不要か？

岡山大学教授 堀口悟郎

「AIにできることは、AIに任せよう」という風潮

「AIにできることは、AIに任せよう」。AI技術が進化するにつれて、このような言葉を耳にすることが増えてきました。学校教育も例外ではありません。たとえば、生徒一人ひとりの習熟度にあつた問題をセレクトしてくれる「AIドリル」が普及したことにより、授業の一部をAIに任せる流れが生じつつあります。

こうした教育におけるAIの普及には、たしかにさまざまなメリットがあります。たとえばAIドリルは、平均的な生徒にあわせざるをえ



ない「集団授業」の限界を克服するツールとして期待されています。また、AIに教師の仕事の一部を委ねることができれば、深刻な社会問題となっている「教員多忙化」に歯止めをかけられるかもしれません。

しかし、それでは、AI技術の進化により「AIにできること」が果てしなく増加していったとき、学校教育は「丸々

AIに任せよう」ということになるのでしょうか。そのような「AI時代」において、人間の教師はもはや不要とされるのでしょうか。

決してそうではありません。ユネスコが2019年に採択した「AIと教育に関する北京コンセンサス」にも、「教師と生徒のあいだの人間的交流と協力は、教育の中心であり続ける必要がある」「教師が機械に取って代わられることはないことを認識し、教師の権利と労働条件を保護すべきである」と明記されています<sup>1)</sup>。

なぜ、AI時代にも人間の教師が必要不可欠だと考えられるのか。私の専門である法学の観点からお話しましょう。

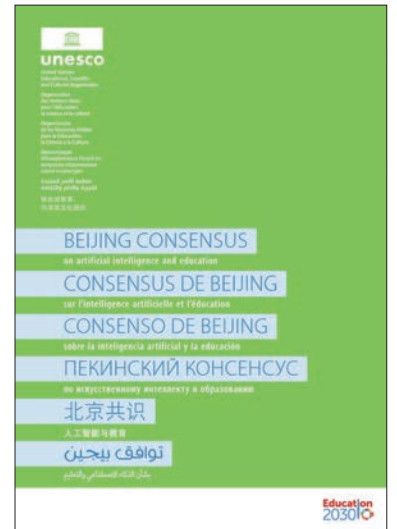
### 「AIにできること」≠「AIに任せてよいこと」

はじめに指摘すべきことは、AIに「できる」としても、AIに「任せてよい」とは限らない、という事実です。「できる」かどうかは技術上の問題であるのに対し、「任せてよい」かどうかは法律上の問題です。技術的に可能であったとしても、人々の権利・利益を損なうような場合には、法的に禁止すべきです。そして、この「人々の権利・利益を損なう」という点で、AIには大きなリスクがあります。そのため、人間自身が行うことは許されても、AIに任せることは許されない行為、というものが存在します。

具体的には、AIは与えられたデータから確率的な判断をするため、思いもよらぬミスをするおそれがあります。みなさんも、生成AIに質問した際、まったく誤った情報をもつともらしく回答された、という経験があるのではないのでしょうか。

私も、前に「憲法学者の堀口悟郎とは、どのような人物ですか」と質問してみたところ、「東京大学名誉教授で、日本を代表する憲法学者の一人です」などと回答されました。まんざらでもない気持ちになってしまいましたが、明らかな誤りです。

このようなミスは、AI技術の進化に伴って減少していくものの、完全になくすることは不可能だといわれています。したがって、重要な行為については、AI任せにすることは許されず、人間自身が決定すべきだと考えられています。日本の法律には明記されていないのですが、たとえばEU（欧州連合）の個人データ保護法である「GDPR (General Data Protection Regulation)」は、AIなどによる自動的決定の対象とされない権利を保障しています。



ユネスコ「AIと教育に関する北京コンセンサス」(2019年)

また、AIのデータ処理能力は、人間の能力をはるかに超えています。たとえば、人間の教師が教室にいる全生徒の表情を注視し続けることは、物理的に不可能です。しかし、AIなら、一人一台端末のインカメラから全生徒の表情データを取得し続けることができますし、10秒ごとに表情データから各生徒の感情を分析し、その変化を記録し続けるといったことも可能です。このように、データ処理能力に格段の差があるため、同じ行為でも、人間が行うかAIが行うかで、その影響力はまったく異なります。

したがって、AIが行う場合には、人間自身が行う場合よりも厳格な規制が必要だと考えられています。EUで2024年5月に「AI規制法」が制定されるなど、AIに特化した法律の整備が進められているのは、そのためです。日本でもAI規制法の制定に向けた検討がはじまっています。

### 「AIにできること」の限界

そのうえ、そもそも「AIにできること」には限界があります。

たとえば、Aドрилは「学びの個別最適化」を実現するツールだといわれています。しかし、このAI技術は、ある生徒がどの問題に正解し、どの問題で間違えたかといった限られたデータから、次に出題すべき問題をセレクトする程度にとどまります。成績低下の原因としては、学力不足だけでなく、人間関係によるメンタルの不調などもありえますが、Aドрилには、そうした問題を察知して対応することはできません。

それなら、AIが生徒の表情データまで取得し、感情分析を行えばよいではないか、と思われるかもしれませんが。実際、一部の学校では、このようなAIによる感情分析の実証事業が行われている。しかし、その感情分析が真実に合致しているかという問題はおくとしても、人間の感情というものは、むやみにのぞかれない繊細な情報ですし、常に表情を監視され、感情を分析され続けるという状況では、のびのびと学習することができません。このような理由から、EUのAI規制法では、学校などの教育機関において人間の感情を分析するAIを使用することは、「許容しえないリスク」を抱えているため「禁止」すべきだと定められています。日本でも、将来的には、こうしたAIの使用は厳格に規制されることになるでしょう。

また、欧州評議会が2022年に公表した報告書にも記されているように、Aドрилは、共通の目的地（全生徒が習得すべき知識）を前提にしたうえで、そこにたどり着くまでの経路（その知識を習得するために解く問題）を個別化するものとどまります。しかし、本来、生徒一人ひとりの個性に応じた学びというものは、いかなる知識を身につけ、どのような人生を送りたいかという、目的地の個別化を意味するものでしょう。この点でも、AIによる「学びの個別最適化」には大きな限界があります。

### AI時代にこそ、人間の教師が重要

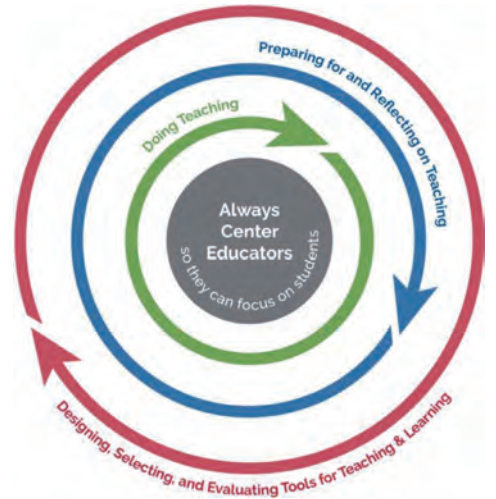
これまでお話ししてきたように、AIに「できる」ことには限界がありますし、技術的にできるとしても、AIに「任せてよい」とは限りません。技術的にも法的にも、「AI先生」にはさまざまな制約があります。そこで重要になるのが、人間の教師の役割です。

教師は、生徒たちとの人格的交流を重ねるなかで、AIが収集したら重大なプライバシー問題となるセンシティブな情報も含めて、さまざまな情報を得ることができます。そのため、生徒一人ひ

とりのことを、学習成績のみならず、学校での生活態度、同級生との会話、教師への相談内容などから、多面的に理解することが出来ます。そして、それらの情報から、各生徒に最適な学習の「経路」はもちろん、将来にわたる学習の「目的地」についても、生徒と一緒に考えることができます。

また、AI時代においては、教育におけるAIが正しく有効に使われるようにリードすることも、教師の重要な役割となります。AI技術を開発している民間企業の多

くは、教育に関する専門的な知識・経験を有していませんし、自らAIを使って学校教育を行うわけでもありません。そのため、教育の専門家であり、教育現場にいる教師が、AIの使い方を創意工夫することはもちろん、AIの設計や選定にまでかかわることが必要だと考えられます。アメリカ連邦教育省は、このような考え方を「教育者を常に中心に置く (Always Center Educators)」と表現し、右図のとおり、AI時代に人間の教師が担うべき役割として、①教育を行う、②教育の準備・計画・反省を行う、③AIを含む教育ツールの設計・選定・評価を行う、という3点を挙げています<sup>3)</sup>。



「教育者を常に中心に置く (Always Center Educators)」

以上のとおり、いくら教育におけるAIの技術が進化しても、人間の教師が不要になるわけではありません。AIにできること、任せてよいことには限りがありますし、学校教育に適したAIのデザインや使い方を見定めるためには、教師の関与が必要不可欠です。その意味では、むしろAI時代にこそ人間の教師が重要になるといっても、決して過言ではないでしょう。

\*1 UNESCO, Beijing Consensus on Artificial Intelligence and Education, 2019, Par. 12.

\*2 Wayne Holmes et al., Artificial Intelligence and Education: A Critical View through the Lens of Human Rights, Democracy and the Rule of Law, Council of Europe, 2022, p. 34.

\*3 U.S. Department of Education, Office of Educational Technology, Artificial Intelligence and Future of Teaching and Learning: Insights and Recommendations, 2023, pp. 25-26.



# AI先生はナンセンス 善悪を主体的に判断できるのは人間だけ

東京財団政策研究所研究主幹／武蔵野大学教授 貝塚茂樹

## 1 AIの「答え」は常に正しいのか

「AI時代の到来にどう向き合うか」「AIをどう活用できるか」「AI活用で成績を上げる」などの言葉がテレビでも雑誌でもあふれています。みなさんも目にしたことがあるでしょう。

ベネッセコーポレーションの調査（2024年7月）では、小学生の2割が「生成AI」を知っていると答え、そのうち7割は利用経験があると答えています。すでに生成AIの利用は日常化しています。

生成AIとは「新しいコンテンツを自動で作りに出すAI」のことです。例えば、「英語で自己紹介文を作成して」などの指示文（プロンプト）



を入れれば、すぐさま見事な文章を作成してくれます。非常に便利です。とはいえ新しいものを「生成」しているかどうかには疑問がのこされているので、以下、「AI」と表記します。

私は大学の教員ですが、講義でもAIを使ってみる必要があります。私の学生はほとんどが教師を目指していますので、AIに授業の指導案（授業の計画書のようなものです）を作成させることもあります。条件となるプロンプトを入れれば、見事な指導案が出来上がります。その出来ばえはベテランの教師が書いたもののようなものです。

次に、この指導案をもとに学生が先生役と生徒役に分かれて模擬授業をしてみます。ところが、驚いたことに、ほとんどすべての授業はうまく行きません。指導案は素晴らしいのですが、なぜかチグハグなのです。どうしてでしょうか？

考えてみれば当たり前です。そもそも指導案は先生役の学生が自分で考えたものでなく、その身を十分に理解できていないからです。また、生徒役もAIが予想したものとは違う受け答えをします。なかには、生徒役からまったく思いがけない想定外の発言が出ることもあります。

みなさんも経験していると思いますが、クラスの中の雰囲気は常に動いています。その時々でさまざまに変化します。その日の天気によってさえ変わることも珍しくありません。つまり、実際に生徒と直接接することのないAIにはクラスの実態はわからないので、一般的な「素晴らしい」指導案は書いてもクラスの実態に合った「ふさわしい」指導案は書けないのです。

このことは、AIの特徴に関係します。AIは大量のデータから学習し、そのデータに基づいて新しいコンテンツを「生成」します。したがって、データに基づいた誰もが納得しそうな一般的な「答え」を与えてくれますが、それはあくまでも一般的なものであって、いつでもどこでも通用す

る普遍的な「答え」ではありません。

しかも、さらに重要なことは、A-1確率的に高い「答え」を出すために、その選択は一定の方向へと画一化してしまい、判断の幅を狭めてしまう危険性があることです。簡単に言えば、生成A-1が導き出す「答え」は常に正しいわけではなく、誤りを含む可能性があるのです。

## 2 AIは道徳を適切に判断できるのか

A-1には道徳を判断することはできるのでしょうか？ このことを「トロツコ問題」を例にして考えてみましょう。

「トロツコ問題」とは、トロツコが暴走して、このままでは複数の人が死亡するけれども、その進路を変えれば彼らを助ける代わりに別の1人を犠牲にして死なせることになるというジレンマ状況を想定し、進路を変えるべきか否かを考えるというものです。

ある研究では、人間はトロツコの進路を変えることが悪いと判断する傾向が強かったのに対して、A-1は別の1人を犠牲にしても、トロツコの進路を変えなければならないと判断するようです。A-1は犠牲者の数を最小限にすることが正しいと判断したわけですが、この判断は人間の道徳的な判断とは違っていたわけです。

どちらの判断が「正しい」かは難しい問題です。しかし、人間とA-1の判断が違っている要因は明らかです。人間には心（感情）があるけれども、A-1にはないからです。A-1は大量のデータに基づいて、合理的、功利的な判断を「正しい」としますが、ここに人間の感情が加われば、判断は変わる可能性が高いのです。

「トロツコ問題」は一定の条件に基づく仮定の「思考実験」です。ところが、私たちが日常的に経験する実際の状況はもっと複雑です。例えば、複数の人間が子どもで、別の1人が老人であったらどうでしょうか？ また、逆の場合はどうでしょうか？ 複数の人間が2、3人ではなく、100人だったらどうでしょうか？ こうした条件を加えると、「正しい」と考えていた判断も変わるかもしれません。つまり、私たちが現実直面する状況では、さまざまな点を総合的に判断しながら、より良い「答え」を導き出していかなければなりません。その意味で、私たち人間だけが道徳的な判断をする主体（主人公）なのです。

## 3 道徳的な判断にA-1をどう利用するのか

では、道徳的な判断をするためにA-1は必要ないのでしょくか？ 実はそうとも言えないのです。A-1が進化するなかで、もはやA-1を抜きにしてこれからの社会を考えることはできません。正しい判断をするために、A-1が導き出した「答え」を無視するというのも現実的ではありません。

近年では、A-1を人間の道徳的な判断や行為を選択する際の補助に利用しようという研究も進んでいます。また、人間が単独で道徳的な判断をするのではなく、人間とA-1が協働して道徳的に「正しい」ことを判断し、行為すべきであると主張する研究者もいます。

こうした主張を否定するつもりはありません。しかし、その前にはまだ乗り越えなければいけない課題があります。それは、先に述べたように、人間には心（感情）があるが、A-1にはないという事実です。また、私たちが道徳的な判断をする際には、やはり心（感情）による部分が大きいという事実です。なぜなら、私たちは自分が本心に納得しなければ、行動に移すことができないから

これまで述べたように、私たちの大切な道徳的な判断をAIに委ねてしまうことは間違いです。しかし、AIの導き出した「答え」を意図的に無視することも誤りです。なぜなら、AIの「答え」はこれまでの大量のデータに基づいた統計的で客観的な「答え」であり、それ自体は質の高いものだからです。

つまり私たちは自分が主体的に考え、判断の一つの貴重な材料としてAIの導き出した「答え」を利用すれば良いのではないのでしょうか。それがAI時代には大事なことだと思います。私たちは人間です。人間の特権は考えることであり、私たちは考えるという自由を持っています。そして、この自由こそが人間としての大切な道徳なのです。



## 第5章

### AI時代の先生はどう働いているか？

東京財団政策研究所研究主幹 松本美奈

未来につながる、今の教室はどうなっているのでしょうか。早速、東京都杉並区立天沼小学校にお邪魔し、先生の1日を密着取材しました。資料に沿って、説明しましょう。

#### ●1年生担任のA先生の場合

教員歴3年目のA先生は、8時には教室に入り、授業の準備を始めます。子どもが次々に教室に入ってくると元気な声で「おはよう」。子どもはランドセルを開けて宿題の漢字ドリルを持って、A先生を取り囲み、一斉におしゃべりを始めます。

「先生、きょう弟がね」「先生、きのうね」…。ドリルに丸つけをしながら、A先生は一人ひ





とりにあいづちを打っていきます。同時に、教室の後ろでおしやべりをしている子に「1時間目の準備をしましょう」と指示します。

教室のベランダに出て、朝顔の植木鉢にキノコを発見した子どもが「毒キノコだ」と大騒ぎ。ドリルを閉じて、子どもと一緒にベランダに走り、「毒かもしれないから、さわらないでね」と声をかけます。朝からマルチタスクをこなしています。

授業中も子どもの状況に目を配っています。黒板の前で説明した後は、机の間を歩きながら、困っている子を探します。わかっていない子はなかなか「わからない」と手をあげないからです。

「先生、指切った」。紙で切ってしまったようです。急いで教壇奥の棚から絆創膏を取り出し、指に貼ってあげました。

休み時間になると、子どもはまた先生の周りに集まります。短い休み時間にはトイレと水飲みに行くよう指示し、先生自身は次の授業の準備です。長い休み時間は、子どもと手をつないで校庭に飛び出し、早速鬼ごっこを始めます。鬼になったA先生の周りに子どもが元気な声をあげながら走り回っています。

資料1

先生はどう働いているか

2024年10月10日(木) A先生	学校全体	2024年10月18日(金) B先生
7:53 出勤 8:00 職員室(1階)から教室(2階)へ移動 ・授業の準備:電子黒板を立ち上げ、タブレットとつなぐ ・パソコン上の掲示板で子どもの欠席連絡を確認 ・黒板に子どもたちへの指示を書き出す ・トイレ	8:00 出勤	8:00 出勤 ・職員室でパソコン上の掲示板を確認 ・社会と算数の授業準備を始める。 授業構成やスライド作成 ・同僚と行事について話し合い
8:15 子どもが教室に入ってくる。 ・子どもが宿題の漢字ドリルを見せにくる。 ・A先生はドリルの丸つけをしながら、複数の子どもの話に耳を傾け、授業の準備をするよう教室全体に指示も出す。	8:15 朝の支度	8:24 教室(4階)へ。 ・複数の子どもの話を順番に聞いている。
8:30 挨拶。子どもに本日の時間割を説明。	8:30 朝の会	8:28 朝の会(子どもが進行)クイズの会
算数 8:41 遅れて入ってくる子に注意する。 ・教室の中を歩き回りながら、授業。 ・子どもからの質問に答えてその場で教える。 9:24 子どもが「指切った」。「ちよっと待って」と声をかけ、教壇奥の棚から絆創膏を持ってきて貼る。	8:40 1時間目	算数 8:50 子どもに問題を作成させて、自ら解かせる。教室の中を歩き回りながら、個別に指導。
9:26 ・子どもに算数のノートを提出させ、授業中に出した課題のチェック。その間、複数の子どもの話を聞きながら。 ・教室全体に「トイレと水飲みに行つてね」と指示を出す。 ・次の時間の教材準備を始める。 ・電子黒板に国語のデータを読み込ませる。	9:25~9:30 休み時間	トイレ
国語 9:34 子ども着席。 9:40 この日は聞き取りのテスト。子どもは機械の音読を聞き取り、理解した内容を書き込む。おしやべりをしている子がいたため、「しやべらないで」と注意。 9:50 廊下から本棚を移動させる。「終わった人は本を読んでください」と呼びかける。 ・テストに手こずっている子に個別指導する。 9:58 全員終了。指示を出し、子どもに本を片付けさせる。「順番にきれいに返せるといいなあ」と注意喚起。 10:00 次の聞き取りテストを始める。 10:15 2人残して終了。終わらない子に個別指導 10:17 終了	9:30 2時間目	社会 9:30 信長と秀吉にフォーカスして戦国時代全体を掴む 9:50 教科書会社が作成した動画を再生。 10:00 「いったん社会はここで終了」と伝え、秋の体育発表会(運動会)の準備をクラスで始める。 ・クラス全体で、配置について話し合いを始める。 ・B先生は6時間目の体育(御神楽)のスライドを作成しながら、子どもの話し合いを助ける
10:20 提出物(ドリル)の数を確認 10:22 クラスみんなで校庭へ、鬼ごっこを始める	10:15~10:30 休み時間	10:20 プリーナ(体育館)へ誘導。学年集会
10:30 教室に戻る。朝丸つけをしていた漢字ドリルを返却。子どもに取り組ませる。机の間を歩き回りながら「昨日勉強したところはどうでしたか?」子ども自身に見直しを指示	10:30~10:50 チャレンジタイム	10:33 職員室で水分補給 10:40 教室に戻る。6時間目(体育、運動会演目)のスライド作成 10:48 子どもを理科室(3階)へ引率する
国語 10:50 担任クラスで先輩のベテラン教員が授業するのを見学。 A先生にとっては「研修」のため、教室の様子をノートに記録する	10:50 3時間目	理科(理科専科の先生が授業) 10:51 職員室で6時間目のスライド作成 11:10 副校長と学校行事で打ち合わせ。外部団体から「キャリア教育」で持ち込まれた企画の内容点検
11:40 トイレ	11:35~11:40 休み時間	11:38 保健室にいる子に声をかけてから、教室に戻る。
生活 11:42 「連絡帳を出してください」と指示。子どもに週明けの日程について書かせる ・連絡帳は提出させ、きちんと書けていることを確認し、ミニマウスのハンコを押して返却 12:03 翌日の生活科見学について説明。回り方、並び方、気をつけること、持ち物を確認	11:40 4時間目	国語 宮沢賢治「やまなし」 11:50 グループワークの席になるよう指示。机の間を歩きながら、子どものやりとりを聞く。「タイトルの意味」を用紙に手書きさせ、タブレットには学習感想を書かせる。

2024年10月10日(木) A先生	学校全体	2024年10月18日(金) B先生
12:29 棚からエプロンと三角巾、マスクを出して身支度を整える。給食ワゴンを教室に運び入れる 12:33 給食当番の子どもの配膳を指導 12:37 みんなで手を合わせいただきます ・A先生はすぐには食事を始めず、子どもが後片付けしやすいように給食台を整える 12:42～12:46 この日のメニューはハヤシライス。A先生は4分で完成！ ・食べながら注意も。「ハヤシライスのグリーンピースだけを残すとか、やめてくださいね」「○○さん、前向かないと食べ終わらないよ」 12:46 机の間を踰えて歩き、子どもの食事状況を見る。「おかわりどろろ」と呼びかける ・果物をめぐる「おかわりじゃんけん」に参加。負けてがっかりした表情 ・全員が食べ終わった班から片付けを指示 ・食べ残している子を励ます 13:07 子どもと一緒に掃除 配膳台を廊下へ運び出す 13:17 「アリーナ(体育館)に行く人は並んで」→子どもを体育館に誘導し、一緒にボール遊び 13:20 教室に残った複数の子どもが呼びにくる。「当番の子がいらないから、次の学活の準備ができない。教室に戻って、子どもと一緒に学活の準備を始めよう。子どもに黒板の書き方を指導 13:30 アリーナで遊んでいる子どもを迎えに行き、教室に戻る	12:25～13:35 掃除・昼休み(午前授業の日は、掃除・昼休みなし)	12:25 給食ワゴンを運び入れる。子どもに配膳を任せ、B先生は教室前方の教卓でテストの丸つけ 12:38 「いただきます」を聞きながら、丸つけ続行 12:48～12:50 教室で食事。2分で完食！ 12:51 食器の片付けをして、丸つけ再開。点数をパソコンに入力 「若い先生にはこんな姿は見せられません！」でもこうしないと、早く帰れないので、「このクラスは5年から持ち上がり。これまでガッツリ指導してきたから、任せておけます」 12:58 漢字テストの丸つけ 13:00 子どもは「ごちそうさま」とあいさつ、自分たちで後片付けもきちんとする 13:04 給食ワゴンを子どもと一緒に搬出。丸つけに戻る。子どもは6時間目の体育の準備 13:12 漢字テストの丸つけ、パソコンへの点数入力を終え、職員室へ。机上に置かれたペットボトルのコーヒードリンク(朝の飲み残り)を一口。トイレに行つて、教室へ 13:14 「ケンカです」と6年他クラスの子どもから聞き、その教室へ。そのクラスの担任は本日出張で不在。B先生は学年主任のため、バックアップをしている 13:17 教室に戻り、来週の時間割をパソコン上の掲示板に入力 13:20 帰りの会。次週の目標を子どもが話し合うの聞く 13:29 子どもを音楽室へ引率
学活 13:35 テーマは10月末にクラスで開く「ハロウィン」イベント。クラス全体が仲良しになれるような提案を出して、と呼びかける。 13:50 議論を始めさせる。先生は司会 14:25 拍手して終わり。帰りの支度をさせる	13:35～14:20 5時間目	音楽(音楽専科の先生が授業) 13:35 職員室で同学年教員と体育発表会の打ち合わせ。着替え 13:45 事務室に書類提出 13:45 職員室で次週の提案作成。
14:30 終わりの会。明日の確認 14:33 隣の1年2組にも声をかけ、2クラス一緒に玄関まで誘導。子どもの下校を見送って図書室に走る	14:20～14:25 休み時間	14:20 アリーナで6時間目の体育の準備。音響設備などをセット
補教(出張に出ている他クラス担任教員の代わりを務める)図書室の時間に立ち会う 14:40 図書室で本を選べない子の相談に乗りながら、担任クラスの子の課題をチェック。次週の指導計画案を記入。 15:07 図書室(2階)から教室(3階)に誘導。「しゃべらずに歩きますよ」と声をかける	14:25～ 6時間目	体育 14:25 学年全体で運動会の練習。御神楽の模範演技 15:10 終了
15:15 終わりの挨拶をして掃除 15:25 掃除終了。下校 15:30 担任クラスの教室に戻る	終わりの会、下校	15:20 教室へ、「さようなら」子どもが全員教室から出るのを確認 15:30 職員室で提案作成。 次週の行事について同学年教員たちと打ち合わせ。
15:35 算数ノートを添削 16:05 職員室で、ボランティアの人と日程等の打ち合わせ。 ・事務室に書類提出 ・職員室に戻り、学年の先生と打ち合わせ	15:45～16:30 休憩	
16:30～16:45 全体会議(子どもに関する情報共有、出退勤簿に関する連絡事項) 16:50 提出物チェック。あくびをしながら、でも手は止めない 17:10 欠席した子の家に電話し、様子を探る。教員の卓上には電話が置かれていないため、別席からかける 17:15 同学年の先生と、翌日の生活科見学に関する確認 17:25 他学年の先生に授業見学をお願いします。「来週金曜日の授業を見学させてもらえませんか」。いったんは断られても粘り、OKをとりつける。 17:30 提出物に丸つけ。事務書類を記入して提出 17:45 ミニバスケットボール部の活動を見て、アリーナへ 18:15 「物品請求書」を取りに事務室へ。運動会に必要な物品について職員室で打ち合わせ。「帰りたいな～。この時間になると、さすがに疲れる」とひとりごと 18:30 テストを採点して、パソコンに入力 18:37 パソコンを閉じる 18:45 退勤。自転車に乗って帰宅	16:30～退勤	16:30～16:45 全体会議 他学年教員、スクールカウンセラーと打ち合わせ 17:20 他教員と一緒に「御神楽」の動画を廊下で撮影。 17:28 職員室に戻り、編集作業 17:55 子どものタブレットに配信。 18:00 「終わっていないけれど、帰って晩ご飯を作ります。パパの仕事に戻ります」。運動会行事の資料作成は週末、自宅でするという 18:10 着替えて退勤。

給食の時間になると、エプロンと三角巾、マスクを着けて、給食当番の子どもに指示を出しながら、配膳開始。今日はハヤシライスです。「いただきます」と声を合わせてから、後片付けをしやすいように配膳台を整え、やっと食べ始めます。「ハヤシライスのグリーンピースだけを残すとか、やめてくださいね」と注意をしながら、先生自身は4分で完食です。

給食が終わると、次は掃除です。当番の子どもとホウキを持って教室をきれいにします。「いままどきのご家庭ではホウキを使わないでしょうから、トレーニングですね」とA先生はぼそりと。

子どもの下校を玄関で見送り、職員室に戻って、会議に参加したり、ボランティアの人と打ち合わせをしたり。A先生は、自分の研修にも熱心です。先輩の先生に「授業見学をさせてください」とお願いし、いったんは「見せるほどの授業じゃない」と断られながらも、粘り勝ち。授業見学の時間をゲットしました。

事務仕事を終え、午後6時37分に机上のパソコンをシャットダウン。出勤してから10時間以上経って、少々疲れた表情ながらひらりと自転車に乗って「お疲れ様でした」。

### ●6年生担任B先生の場合

同じ学校でも6年生担任のB先生の日常はやや異なります。学年を取りまとめる「学年主任」のため、校長や副校長や外部スタッフらとの打ち合わせの時間も少なくありません。特別支援学級に通う子や不登校の子への対応にも時間と工夫が必要になります。

ただ、担任しているクラスは5年次からの持ち上がりで、1年以上かけて指導してきたことから、給食時間や休み時間の対応は子どもに任せることができるそうです。確かに、給食の時間も子ども

だけで配膳をさっさと済ませていました。B先生はその間、社会のテストの丸つけ。さすがに作業しながらの食事を見せるわけにはいかないから、黒板前の机で子どもと向き合って食べ始めました。この日の献立はひじきごはんにニギスの磯辺揚げ、豚汁。それを完食までわずかに2分。ほとんど丸呑みでした。食事が終わると教室脇の教卓に戻り、作業を再開します。テスト結果をパソコンに入力して、やっと終了です。

6年生ともなると、理科や音楽など専科の教員による授業が1日にいくつか出てきます。この時間は授業準備や学年の教材作りに充てることにしているそうです。授業

の構成を考え、教材を用意する仕込みの時間です。ただ、当日に仕込んだ準備を慌ただしく直後の授業に振り向けなければならないことも多く、取材した日も「授業がグダグダになってしまった…」と準備不足を反省していました。

学年主任は、学校行事への取り組みでも中心的な役割を求められます。授業後には、運動会で披露する学年の演目「御神楽」の動画作りに他教員たちと分担して取り組んでいました。お手本を披露する教員に撮影する教員。B先生はその動画を編集し、学年の子どもの学習端末に配信していました。これ以外の資料は週末、自宅で作成すると話していました。午後6時。「帰って晩ご飯を作ります。パパの仕事に戻ります」と職員室を後にしました。

●先生の仕事、先生がしなくていい仕事

実は今、先生の「長時間労働」が問題にされています。実際、二人の先生は10時間以上、学校で過ごしていました。帰宅して食事や入浴、明日の準備をしたら、あつという間に夜中です。そこで、そこで文部科学省（以下、文科省）が対策の一つとして打ち出したのが、仕事の「3分類」です。学校内の14項目の仕事を「基本的には学校以外が担うべき業務」「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」「教師の業務だが、負担軽減が可能な業務」の三つに分類し、それぞれを外部の人やIT機器などに任せれば、「教師でなければできない業務」に専念できると見込んでいます（資料2）。

では先生たちは、この3分類通りに分担しているのでしょうか。

A先生たちのいる天沼小学校は、保護者や地域住民との



この日の献立は、ひじきごはんにニギスの磯辺揚げ、豚汁。「かみごたえ」を重視したメニューだったそうですが、B先生はほぼ丸呑み、2分で完食です

資料2 学校・教師が担う業務に係る3分類

基本的には学校以外が担うべき業務	学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務	教師の業務だが、負担軽減が可能な業務
①登下校に関する対応	⑤調査・統計等への回答等 (事務職員等)	⑨給食時の対応 (学級担任と栄養教諭等との連携等)
②放課後から夜間などにおける見回り、児童生徒が補導された時の対応	⑥児童生徒の休み時間における対応 (給食、地域ボランティア等)	⑩授業準備 (補助的業務へのサポートスタッフの参画等)
③学校徴収金の徴収・管理	⑦校内清掃 (給食、地域ボランティア等)	⑪学習評価や成績処理 (補助的業務へのサポートスタッフの参画等)
④地域ボランティアとの連絡調整	⑧部活動(部活動指導員等)	⑫学校行事の準備・運営 (事務職員等との連携、一部外部委託等)
※その業務の内容に応じて、地方公共団体や教育委員会、保護者、地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等が担うべき。	※部活動の設置・運営は法令上の職務ではないが、ほとんどの中学・高校で設置。多くの教師が顧問を担わざるを得ない実態。	⑬進路指導 (事務職員や外部人材との連携・協力等)
		⑭支援が必要な児童生徒・家庭への対応 (専門スタッフとの連携・協力等)

※個人・団体の教育に向けた業務利用可能な学校図書・運動休日の確保のための学校に付ける働き方改革に関する自治体方針について (国中) (第213号) (平成31年1月25日)

関係がよく、ボランティアや支援スタッフもそろっています。ドリルの丸つけや、休み時間の子どもの対応もできる態勢にあります。けれども、A先生はその依頼をしないそうです。「子どもを理解したいから」です。授業時間だけではわからない学校外での子どもの姿はもちろん、ドリルの取り組み状況からは学習でのつまずきも見えてくるといいます。

「教師の業務だが負担軽減が可能な業務」に位置付けられる給食時対応でも、A先生は1人で奮闘していました。A先生だけではないようです。他の先生も口をそろえます。「子どもの指導に直接かかわることは、外部スタッフには頼みません」。文科省の進める3分制にはそぐわないけれども、教育基本法に定める教育の目的「人格の完成」(第1条)につながる子どもの理解という点では、「指導に直接かかわることは外せない」と考えているのです。

A先生、B先生ともに今一番ほしいのは「考える時間」と話します。子どもの心を理解できる、いい先生になりたい、そのための「考える時間」です。そして二人とも、「教員を辞めたいと思うことはない」そうです。

天沼小学校の先生が特別ではなく、多くの先生が子どものかかわりを大切にしたいと考えているようです。文科省が行った「教員勤務実態調査(2022年度)」結果でも、明らかです。

この調査には、小学校1万7762人、中学校1万7475人の教員が回答しました。勤務時間の実態を調べただけでなく、3分制・14項目の仕事について、ITなどの活用で「削減すべきで削減可能」「削減すべきだが削減は難しい」かの見解も尋ねました。その結果、「児童生徒の休み時間における対応」「給食時の対応」「支援が必要な児童生徒・家庭への対応」など6項目で、大半が「難しい」と回答しました。さらに「無回答」が2〜3割超もありました。その回答ぶりからみると、

文科省が考える「削減すべき業務」を、子どもの理解や指導の根幹にかかわる「教師でなければできない業務」ととらえる先生が多いのではないのでしょうか。

#### ●「人格の完成」をめざす高度な専門職

今から59年前の1966年、国際的な会議で、先生は「専門職」として認められました。高度な知識や技能を持っているだけではなく、「不断の研究」―敬意を払うべき、学び続ける人だとされたのです。日本の考え方もこの流れに沿っています。上司の指示や命令によるのではなく、先生自身の自発性や創造性で、一人ひとりの子どもに向き合うことが求められています。

学校はたくさん抱えています。いじめや不登校、それから地域や経済格差など、重い課題とも格闘しながら、先生たちは目の前の子どものために尽力しています。こうした繊細な問題はロボット先生では立ち行かないでしょう。最新のテクノロジーを駆使した未来の教室に、今、私たちの前で奮闘している先生のような専門職が立っていることを願ってやみません。



## 本と鉛筆のある未来の教室に立つのは

「先生」をめぐるいろいろな話をここまで読んでもらいました。ひとことでもまとめると、「未来の教室に立つのはやはり人間の先生」だということです。

冒頭で紹介したチャットGPTのイラストを見て、気づきましたか。ロボット先生がいる教室の奥の棚には本が並んでいました。そして、取り囲む子どもたちの机の上には鉛筆が立てられています。年上の生徒のところに同じように本が。キラキラした未来の教室にあっても、今と変わらず、本を読み、書くという学びの手法は残ると考えられているようなのです。

チャットGPTがなぜこうしたイラストを作ったのかは、わかりません。実はそれこそが、AIに関する大きな問題の一つ「ブラックボックス」なのです。大量の情報を集めて学習し、複雑なプロセスを経て答えを導き出す。そこまではよしとして、なぜその判断をしたのか、内部の状況は全くわからない、闇に閉ざされている「ブラックボックス」と呼ばれる理由です。

ブラックボックスのままでは、反社会的な偏見や差別といった負の要素を組み込んでいる恐れを排除できません。AIがハルシネーション（幻覚）を起こし、とんでもない「答え」を出す危険性も指摘されています。一方で、チャットGPTを開発したアメリカの企業オープンAIや、提携関係にあるマイクロソフトは、AI技術を非公開にしています。日本は2024年4月、研究者を集めてブラックボックスの解明を始めていますが、まだ朗報は聞こえてきません。

「AIにできること#AIに任せていいこと」と堀口さんは書いています(17ページ)。貝塚さんは暴走トロツコの研究から、犠牲者の人数だけで方向性を決める「合理的な判断」を下したAIに疑問を呈していました(24ページ)。

「合理的な判断」をするAIは、炎天下に1000キロの道のりを生徒と歩くといった妙なイベントを考案しないでしょう(11ページ)。大汗をかき、企画をした先生に恨み言をこぼしながら仲間と歩く時間は、忘れえない経験となったはずです。良くも悪くも、そんな先生との思い出が子どもたちの行く道を切り開く可能性がある、萩生田さんは語っています(5ページ)。

もしかすると、このイラストはAIからの示唆に富んだメッセージかもしれません。

〈本を読み、文字を書き、最後は自分で考えて！〉

教室の中央にいるのはロボットだけれど、実は描かれていないところに、その最も大切なことを教える人間の先生が毅然として立っているのではないのでしょうか。

あなたの道は始まったばかりです。どの道に行くか、ゆっくり決めてください。でも最後に一言だけ。教室はあなたを待っています。



---

## 教室があなたを待っている！～AI時代の先生

発行：2025年3月

発行元：公益財団法人 東京財団政策研究所

研究プログラム「AI時代の先生～教職の制度設計を再構築する」

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-15-16 笹川平和財団ビル5階

TEL：03-5797-8401 E-mail：pr\_support@tkfd.or.jp URL：https://www.tkfd.or.jp

---

無断転載、複製及び転載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを必ず明記してください。

東京財団政策研究所は、日本財団及びボートレース業界の総意のもと、ボートレース事業の収益金から出捐を得て設立された公益財団法人です。

※本冊子に掲載された発表内容や意見は筆者個人の見解であり、当財団としての見解を必ずしも示すものではありません。

本書のデジタル版はこちら。  
[https://www.tkfd.or.jp/research/  
detail.php?id=4682](https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=4682)



本ブックレットは、東京財団政策研究所の研究プログラム  
「AI時代の先生～教職の制度設計を再構築する」  
の研究成果として製作いたしました。



東京財団政策研究所

THE TOKYO FOUNDATION FOR POLICY RESEARCH